



# 佳作

## 僕とピアノの12年

長尾 義明

変な話、僕には友達と呼べる人がいなかった。だれとも仲が良くなかったわけではないし、決して家族以外とは話そうとしないような内気な性格だったわけではない。おそらく外遊びを好まず、人を家に呼ぶことにも関心がなかったからだろうと思う。そもそも「彼は自分の友達である。」と人に言える人は、その人の言う「彼はもう「親友」というところまでいっている気がする。もしそうなら、実は僕にも気づいていないだけで「友達」ならいたのかもしれない。しかし、はっきりしない部分はあるものの、少なくとも僕が人と関係を築くのが苦手であり、容易ではなかったのは確かである。

前文で長たらくつづってきた文章は、今の僕から言わせれば、無論ほぼ過去である。僕は変わることができた。

音楽に出会えたおかげで。

なんでも母によると、僕がピアノという楽器に出会ったのが1才だったと言う。とは言え、そのピアノというのは、とても小さくて、音階も少なく、「ざーざー、さーさー、チューリップのーはーなーがー。。」をやっとひけるかくらいのおもちゃのピアノだった。

そんなピアノを3才の僕は、ひまさえあればその小さな指をけんばんにのせ、それはもうひどくたたきまくったそう、いつしかそのピアノもぼろぼろになってしまったと言う。

両親がこれを見て、「うちの子はピアノに興味があるらしい」と気付いてくれなかったら、今の僕はいなかったかもしれない。両親は大きめの電子ピアノを購入。そ

のピアノは、以前に比べるとだいぶ大きく、音階もふつうのアップライトピアノなどとさほど変わりはないくらいだった。「あし」がついていないため、床やソファの上に置いてひかなくてはならなかったが、僕はたいそう喜んだという。

それはおもちゃだったのはまちがいないが、音を変えたり、いくつか入っている曲を流したりもでき、以前のピアノに比べて数百倍もおもしろいものだった。

やはりそれも僕はとても気に入ってずっとひいていた。

このころ、〃本物の〃ピアノは、母方の祖父母の家にあった。何度かそのピアノに出会う前にも、さまざまな場面でピアノを見てきたが、当初の僕が決めていたピアノの定義は、「黒くてつるつるしていて鉄でできてくる。」というものだった。なにせ黒いピアノばかり見てきたものだったため、まさかピアノがああ茶色の木で出来ているとは思わなかったのだ。そして、だいぶ例の電子ピアノをひき深めてきたころ、祖父母のうちへ行っ

た。そしてそこにあったピアノを見た瞬間、僕のそれまでの「ピアノの定義」がくつがえされた。

なんと茶色なのだ。しかも茶色く完全にぬられてはならず、木の筋や木目がどこどころにあるではないか。少し黄色っぽいところもあり、そのピアノは金色に光って見えた。

その美しいアップライトピアノに魅了されてしまった僕はすぐに二つのことを学んだ。

一つは、ピアノは木で出来ているということ。

もう一つは、ばあば（その祖父母のことはじいじばあばと呼んでいた）のうちにあるこのピアノはとってもきれいだということ。

これが、のちのち僕の大親友となるピアノとの出会いである。

そのころになって、僕はついにピアノのレッスンを受け始めた。3才の時だった。

はじめのうちはグループレッスンだったが、後から個人レッスンになった。グループレッスンの時も個人レッ

スンになった時も、教えるのは同じ女性の先生だった。

とても優しく教えてもらい、僕はますますピアノという物に興味を持った。とにかく楽しかった。そして、曲らしい曲をひくことができることに喜びを感じていた。家での練習では例の電子ピアノが活やくしてくれた。

僕は、ピアノを習いはじめてからしばらくすると、ピアノストっていうのはひくばかりではだめだと思うようになった。実際、バッハやモーツァルトなどの偉大な音楽家たちも、有名になったのはピアノをひけるから、という理由だけではない。作曲だ。やはり、自らを後世へ残すには、ピアノの天才としての自まん話よりも、楽譜というものに自分の天才ぶりを書き記す方が、ずっと説得力があったにちがいないのだ。

僕はそんな天才では決してなく、ただピアノをひける程度だった。しかし、作曲をしてみたいとは思っていた。なにも、世界トップクラスの作曲家に、「なんと美しいせん律なんだ。」「こんなに心やすらぐ曲はきいたことがない。」などとさわがれる曲を作ろうと思ったわ

けではないし、むしろごめんだ。ただ、自分の気持ち音楽にできたらどんなにいいだろうと思ったのだった。そして、やってみることにした。小学一年生の時だった。

まず、習っていた先生とは別に、作曲の先生について。その先生に、いろいろと基礎を学んだ。

自分自身、楽譜なんて今までもたくさん見ていると思っていたが、それはまちが이었다。確かに「見ている」だが「読んではいなかった。」作曲りはそれともう大変だった。そもそも分かっているつもりだった音符の形がちがっていた。四分音符が大きすぎたり、へ音符がゆがんでいたり、「言うはやすし、行うはがたし」という教訓を初めて学んだ体験だった。それでもだんだん上手くなってきた。

そして、もう一つ出来るようになったのは、イメージを曲に出来るということだ。これは作曲家にとって一番大切なことだと先生は言う。

ついに曲は出来上がった。題名は「アメリカへ行こ

う！」ストーリー的には、ある人が、（おそらく自分自身が）あっちこっちの国をまわって旅をするというもので、最終目的地がアメリカということになっている。

なぜアメリカだったのかというところ、僕がただ一つ場所がはつきりしていて、「ここ！」と地図を指さし自信を持って言えるのがアメリカだったという理由が最も大きかったと思う。曲はいくつかの楽章に分かれており、それぞれに、いろいろな国のイメージが盛りこまれていて、「象の群れ」、「日本の寺」といった風に曲の感じを分けていた。

メロデーも単純で、そもそも楽譜がぐちゃぐちゃで（なぜじょうぎを使わなかったのだろうか）、消しゴムの消し跡が何重にも重なり、まるで音符が向こうから走ってくるように見えるほど。かの天才モーツァルト先生も、この楽譜を初見で出されては困り果てるであろうひどいありさまだった。

しかし、僕はこのゆがみにゆがんだ楽譜にもすごい喜びを感じた。だれがなんと言おうとこの曲は、長尾義

明作曲の「アメリカへ行こう！」である。このことは僕を大きく成長させた。

そして、この曲は発表会でひくことになった。ピアノの発表会で個人でひくのは初めてだった。初の個人発表会で自分の曲をひかせてもらえるとは、なんてぜいたくなんだろうと僕は思った。

僕の番が来た。目の前には大きなランドピアノ。いすに座り、ひきはじめる。そのころの一年生の僕は、まだ演奏技術はなっていなかった。だから聴いているお客さんはおそらく、「まあ、かわいらしい。」とでも思っていたのだろう。しかし、僕はちがった。なにせ自分の作った曲なのだから、どんなにひき方が下手でも、自身はよく分かっていった。ちょうど今アフリカにいる。ああ次はヨーロッパに行ったという風に、感じながらひいていた。それはもうよかった。気持ちよかった。満足していた。もうこの上ないほど幸せだった。この「アメリカへ行こう！」は、僕の一生の宝物となった。

僕がもうすぐ小学二年生になるころ、教会でピアノの

ミニコンサートのようなものがあって、見に行った。そこでピアノをひいていたのは、男性のジャズピアニストだった。彼のひくピアノはとてもかっこよかった。

そしてあくる日、僕は母と共に、そのピアニストの事務所を訪ねた。彼はとても優しく、この突然の来客人を快く迎え入れてくれた。そして、僕が音楽が好きだという話から、彼は昔の友人でピアノの先生をやっているという人を紹介してくれた。これは願ってもないことだった。お礼を言って、その場を後にした。

僕はその後、その時習っていた先生をやめ、紹介された新しい先生に習うこととなった。僕はそれまで、本やテレビなどでたまに見かけた「恩師」という存在について、具体的によく分かっていなかったのだが、まさしくその先生こそ、のちのち僕の「恩師」となる人、僕の子ども時代に一つの転機をあたえてくれる人だったのだ。

いい事は続く。なんと、あの僕の親しき友人であるじいじとばあば（一年生だったこのころは、まだ僕は作文などでもじいじとばあばという表現を使っていた。ここ

では少しでも幼かった僕を表記するために、あえてじいじとばあばと書かせてもらおう）のうちにあるアップライトピアノが、僕の家に来るといふのだ。僕は飛び上がった。僕の家はマンシヨンの三階だったが、階段でピアノを運ぶのは難しかった。かと言ってエレベーターもないので、クレーンで持ち上げてベランダから運び入れることになった。そして当日、それはもうすてきだった。まだクレーンを間近で見ることがなかったのと、あのアップライトがこの家に来るといふ興奮のあまり、今の三階から飛び下りても無傷でいられるんじゃないかな、などとわけの分からないことを考えていたほどだった。だんだん上にクレーンで持ち上げられていくじいじのうちのピアノ。もう見えそうになっているアップライトピアノ。そして見えた。僕のピアノ！まるで元旦に初日の出が昇ってくるように、（初日の出を見たことはいが）美しいピアノが僕のもとへと昇ってきた。そして、そのピアノはついに、僕のピアノとなったわけである。

さて、ここで一つ話を区切ろう。ここまで聞いていると、何ともかんとも幸せな、どこを見ても黒くよごれたところのない、金色の幼生時代だ、と思われるかもしれない。事実このころはまさに黄金時代だった。さまざまな人に恵まれ、ほしいものも手に入り、転期が転期を呼び、それと共に幸運が幸運を呼んだ。

しかし、その転期、いわゆる展開は、じき起こる大きな展開への幕開けにすぎなかった。それもその大きな展開は、今までの僕の黄金時代に、黒いしみをつけるものだったのだ。

なんだか映画の予告編のフレーズのようになってしまったので、その波にのってもう一言。よくヒーロー番組でヒーローが言うセリフ。まあ、今までが戦いだっただけではないのだが、これからの、という意味である。

「本当の戦いは、これからだ。」

新しく習いはじめた先生には、はじめのうち、わざわざ家まで出向いてくださって教えていたのだが、二ヶ月

ほどして先生の家で教わることになった。

しかし、僕はどちらかというと「夏休みの宿題のほどんどを、新学期の二週間前にあわててやるタイプ」だった。つまり、集中力がなく、「面倒なことがあまり好きではなかったのだ。

そのため、ピアノの練習をおこたっていた時もあった。もちろん、そんな時はおこられていたのだが、そのころ二年生の僕には、もっと重大な問題があったのだ。

何か悪いことをする。すると、「ああ、あれをこうやっておけばよかったんだよ。」と後悔する。そしておこられる。これがふつうの人のしかられる3ステップだと思う。しかし、僕は、その2ステップ目の後にもう一つあったのだ。自分をせめてせめてせまくなって、精神的な病気になるってしまうということだ。

だれでもおこられるのは好きではない。しかしその理由としては、自分ではいけないと分かっていること、自らの得になることを理由とした行動をとることでおこられ、「そんなこと分かっているよ。でも別にいいじゃ

ん。」というような気持ちとなるといふことだろう。

しかし僕はちがっていた。自らの主張をねじ曲げられるのがきらいなのではなく、その人が「おこる」という行為をとることがきらいだったのだ。おこる人の顔や、その口からでる言葉、そういったものが僕はきらいで、僕は常に自分の行動を、正しいかどうかではなく、おこられないかどうかで判断していたのだ。そのため、そういった判断基準のいわば法律を、自らの欲望がやぶってしまい、おこられるという最悪な事態となったときに、僕の精神コントローラーは制御不能となってしまふのである。

話を戻そう。僕は毎回ピアノのレッスン当日になると、学校の授業中も、レッスンのことはかり考えるようになる。頭をかきむしりながら、ああなんでもっと練習をしなかつたのだらうと、太平洋のご真ん中のような深いため息をつき、マリアナ海溝のような深い後悔をするわけだ。

そして、足取り重く、ふらふらしながら、家に帰りつ

く。やがてその精神のゆらぎは体にも影響してくる。

頭が痛くなり、腹も痛くなり、呼吸も苦しくなる。しかし、それらが全て精神異常が引き起こした幻覚だったとも言える。もしかすると仮病という使い方をしていたかもしれない。しかし、僕自身仮病というものはあまり気に入らなかった。のび太君のようななまけ者の人間が、学校の登校拒否に使う奥の手だと知っていたからだ。

ひどい時は学校で具合が悪くなり、保健室に行くこともあった。

でも結局はレッスンに行つて、練習不足をしかられる。だと言うのに、僕は面どうくさがり屋なだけでなく、「のどもと過ぎれば暑さを忘れるタイプ」でもあったのだ。もう分かつたと思うので、ここでの説明はとばそう。

というわけで、このようなことをなんどもくり返し、なんと僕はピアノをやめたいと言いだしたのだ。まだ二年生とはいえ、なんて自分勝手な人間だろう！

しかし、先生は許さなかった。先生は、君にはまだま

だ教えていないことがたくさんあるし、やっぱりピアノに向いていると思う。だからやめないでほしい、と熱心に言ってくれた。僕は先生の言うことに従った。そして、再びレッスンはじめた。例の性格や精神面については、しだいに直ってきた。

先生は僕の耳はとてもよく、音感があると言ってくれた。僕はとてもうれしかった。僕の家に来てくれたあのピアノも、たまに調律をしてもらったのだが、その度に僕が、あのレの音が悪いとか、あのシの音がにごっているとかで、僕がどんどん言うものだから、ふつう調律は一年に一回ぐらいなのに、一年に三〜四回ぐらいやってもらっていた。

なぜ音が悪いのかというと、一番大きな理由としては、やはりあのピアノが古いということがある。

母の話によると、あのピアノは母の小さいころからあったという。さらに、祖父によると、僕の母が小学三年生の時に買ったのだという。計算してみると、少なくとも四十年前のピアノということになる。多少音が悪く

ても無理はない。しかし、見た目はとてもきれいで、僕から見れば新品同様だ。調律師の方も、「いいピアノですね。」とほめてくれていた。

三年生の時、全校会で校歌の伴奏者がいないという事件がおこった。いつも伴奏をする先生は、その日は何らかの用事でいなかったのだ。CDの伴奏を流してもよいのだが、どうも生の演奏にこだわりがあった。

それで仕方なく生徒の中で校歌をひける人を先生たちは探し始めた。しかし、高学年にはひける人はいない。今思うとなぜ先輩たちはひけなかったのだろう。ひけてもおかしくないはずだ。運動会、音楽発表会、そして毎月ある全校会でいやというほど歌っているのだから。

そして先生たちは、半分あきらめつつも低学年に目を向けた。もちろん、少し前の文章であれだけえらそうなことを言っているのだから、僕はひけるに決まっている。校歌の伴奏の楽譜なんてものは見たことはないが、歌えるのだからメロディーはひけるし、それを和音にしたり、そこに左手で適当な伴奏をつければ、だいたい

ひける。それに、いつも先生がひいているのをきいていれば、なんとなく、覚えてしまっている。本物の伴奏を七十〜八十パーセントぐらいは再現できるはずだ。

しかし、このころの僕には「自信」が足りなかった。うちにいる家族にならいくらでもひけるが、五百人以上のもの、それもクラスの人と先生以外は知らない人ばかりという中で、伴奏をひく自信はなかった。しかしかと言って、ひけないわけでもないのだから、「いえ、ただ自信がないので。」という言い訳は、どうも気に入らなかった。そうだよ。だれかひける人いませんか、って言ってるんだから。自信ある人いませんかとはいきいてないじゃないか、と、自分をはげまして、「あの…僕ひけますけど…。」と、本当に不安度と自信なき気度を最高レベルにした声色でそう言ってみた。

そんな僕の気持ちはつゆ知らず。三年生の僕を先生は、ピアノの前にひきずり出した。

その時初めて気がついたのだが、僕は体育館のグラウンドピアノをひいたことがなかった。そのため、少し落ち

着きをとりもどし、好奇心がわいてきた。

ひきはじめた。僕はもう夢中だった。なにせ、本物のグラウンドピアノを、僕は楽譜通りではなく好きにひいているのだ。なんとぜいたくなのだろう。ひき終わってから先生がほめてくれた。クラスの人からも「すごいな」と言ってもらえた。

僕はこの日、初めて自分の指と耳に満足でき、自信が持てた。そしてその日を境に、僕はピアノを学校でもよくひくようになった。音楽発表会などでも伴奏を務めた。

そして、今まで人との関わりが少なかった僕に友達ができはじめた。僕がピアノをひくとクラスの人が寄ってきて、いっしょにひいたり歌ったりできた。そして、全員が僕のひいている曲でつながれていく気がした。

僕のピアノをひく指は、いわば閉じた世界の扉を開くかぎだった。そして、僕をつくる音楽は開けた世界で仲間をつくれるネットワークだった。本当にピアノに、音楽に出会えてよかったと、実感した。

四年生になって友達も増えてきたころ、僕のピアノの先生は、僕に新しいことを教えてくれた。それはコード。音楽の感情、情景、その世界観を表すのに非常に大切な音楽の知識だった。もう少しくわしく言えば、その一つ一つのメロディーやそれからなるハーモニーを、いかにうまくつなぎ、転調させ、かっこよく、美しく、悲しく、さびしく、するかである。

このコードと言うものは意外と数学的で、いわば理論。『これをマスターすれば義明君の音楽能力はもつと高まる。』先生はこうおっしゃった。僕は数学が割と好きだったので、おもしろそうだと思い、教えてもらった。

このコードの勉強は、十二才になった今でも続いている。それほど難しい、音楽界の大問題なのだ。

そのコードの勉強をはじめて、小さな曲づくりなどもやり始めた、五年生のあるころ。先生は、コードが最も複雑に入り組んでいるという曲のジャンルを教えてくださいました。

それはジャズ。4ビート、ボサノバなど、北アメリカや南アメリカの方で生まれた、いわゆる「のれる」曲である。コードが複雑なためとても難しいが、そのコード自体やコードとコードのつながりがとてもなくかつよく、思わず人が酔いしれる、レストランなどで流れる曲だ。

知れば知るほど、聴けば聴くほど、僕はジャズの魅力にひかれていった。そしてジャズの勉強をすることにした。

前文でつづったように、ジャズはコードがとても複雑。そのため勉強には苦労した。今まで習ったクラシックなんかの曲のコードとは全くちがっていた。しかし同時にそれはもうかっこよかった。

ジャズの曲も習った。4ビート、ボサノバ、ブルースなどなど。

ジャズは自由だ。テーマの部分だって、楽譜通りきちんとはひかない。さらにジャズにはアドリブというものがある。テーマと同じコード進行で自分のオリジナルの

メロディーをひく。これが楽しくてたまらない。

そして、さまざまなジャンルのバンドの発表会にでることになった。発表会では、さまざまな楽器の生徒たちがバンドとして集まり演奏するというものだ。僕はもちろんジャズバンドのピアノ。その発表会でひく曲の練習がはじまった。先生にアドリブがダメだとハッパをかけられたりしながらも、どんどん上達していった。

そして同時にクラシックのピアノの発表会の練習もはじまった。二曲ひくのだが、二曲目の「春に寄す」という曲は僕の気に入った曲だった。なんとというか優美な、春だなあと感じるのゆったりした曲だ。

そんなこんなでいそがしくなった僕に、悲しい出来事が起こった。

僕の父方の祖父が亡くなったのだ。六年生になったばかりの、四月九日のことだった。七十七歳だった。

僕が大好きだったおじいちゃん。こんなに早くいってしまふなんて。今これを書いている時も、涙があふれてくる。

親しい人の死は、初めてだった。とても悲しかった。本当に絶望した。うちひしがれたという感じだった。

祖父の死からわずか約一ヶ月。ピアノの発表会の日。まだあの悲しみから半分と少ししか立ち直れていない時に。段上にあがる。

ひきはじめる。そして一曲目が終わり、二曲目の「春に寄す」。

本当はこの発表会には祖父もくるはずだった。だがもういない。

前半のはじめ、ゆったりと左手のメロディーが流れていく。

春は別れの季節というが、こんな別れ、ひどすぎる。音階が低くなり、暗いふんい気に。どんどん曲の感じ盛り上がっていく。

だがこの曲は春の曲。この春が別れの春ならば、この曲もそうだろう。

楽譜の段数が三つに！右手を上げしく動かし、始めのテーマを盛大に。最後クライマックス。

おじいちゃん、これが別れなら、盛大に見送ってあげるよ。だからこの曲を忘れないでね。僕は音楽で友達とも結ばれた。だからこの曲でおじいちゃんと僕も結ばれればいいと思う。これからもずっと。

一気にかけ上がり最後、桜の花が散るように静かに、ふんわりと終わる。

ありがとう。さようなら。

この演奏はすばらしい出来ばえだった。母は僕の演奏に感動したと言っていた。そして、祖父の納骨式でひいてほしいと言われた。

僕はそれに従った。当日、教会のグランドピアノで僕は「春に寄す」をひいた。おじいちゃんはこれで天にのぼっていったと思う。人一人死んだというのに僕はピアノをひいていて幸せだった。僕がその時、だれよりもおじいちゃんにつながれて、最後まで見送れたのではないかと感じたからである。

僕は音楽の大きな学びを得た。人というのは、自分のうれしいこと、楽しいこと、笑うこと、などプラスになることを追求して音楽をつくるより、悲しみ、苦しみ、涙など、マイナスになっているところから、それを追求してプラスにかえて音楽をつくる方が、ずっと音楽にさまざまなことがこめられるということである。そして死という最大のマイナスには、そこから考え、追求していく価値は最もあり、それを受けとめることができた時に完成する音楽というのは、どんな音楽にも勝てない、すばらしいものとなるということ。僕は学んだ。

そしてついにバンドの発表会の日がやってきた。僕はこの時、祖父の死をもうプラスに受けとめれていた。おじいちゃんはさわいだりするのが好きな明るい人だった。ここはおおいに楽しんで、おじいちゃんといっしょに盛り上がろう！

初めてのバンド。リズムを刻むドラムの震動が心臓の奥までびびく感じだった。ピアノのアドリブもかっこよ

くきめられた。全員が一体となってジャズを楽しめていた。  
た。

もう最高だった。

このころ6年生の時、僕の耳はどんどん音感がついてきた。学校でも、教室にある電子ピアノでクラスの人からリクエストされる曲を昼休みはどんどんひいていた。僕は意識的にはなくても、耳に入る曲を三回以上聴けば、たいてい覚えられた。それで、またクラスの人ととても仲良くなることができた。

卒業式の日。僕は歌の伴奏を務めた。この今までの十二年間の感謝の気持ち全てこめてひいた。出会えたピアノの先生は、まさに僕の恩師だった。音楽と人のつながりを熱心に教えてくださった。とても明るく優しく、二年生の時に学校でいじめられた時も、ピアノのレッスンの時間を使って相談にのってくれた。そして先生は、ピアノというより音楽という、すばらしい芸術世界を切り開いてくれた人だった。本当に感謝している。

そして両親もまた、僕のやりたいことを自由にのびの

びとやらせてくれた。そして常に気づく目もち、僕の好きなこと、得意なこと、きらいなこと、苦手なことにいつも気を使ってくれていた。本当にありがとう。

僕は今、中学校という新しい世界へふみ出している。そこにいたのは知らない人ばかりだったが、すぐに仲良くなることができた。もちろんそれは音楽のおかげだった。「君ピアノひけるんだね。」と、向こうから親しくしてくれるので、友達づくりに全く苦労をしなかった。

この学校の人たちは全員個性が非常に豊かだ。パソコンが好きな人、宇宙物理学に興味がある人、数学マニアに社会マニア、絶対だれも知らないような漢字を知っている人など、さまざまだ。もはや個性がない人は置いていかれる世界だった。だが僕は心配なかった。両親が、子どもの個性をのばすことを第一に考えてくれていたおかげで、僕の音楽、ピアノ、ジャズは完全に僕の個性として定着していたのだ。それで僕はすぐクラスに溶け込むことができた。

部活動は吹奏楽に入った。そこには音楽の好きな人がたくさんいた。また、さまざまな楽器を知ることでもでき、とても勉強になる。

ピアノのレッスンの方も続けている。もうジャズの曲は八曲ほどひけるし、アドリブもできる。もうすぐ、セッションに行くことになっている。どんな人たちがいるのか楽しみだ。先生は、まだ僕の知っているコードはほとんど一にぎりだという。これからもっとたくさんコードを習っていくつもりだ。

これが、僕のこれまでの十二年と八ヶ月の音楽と共に歩んできた子供時代の記録である。

今までを振り返ると、僕の子供時代の事件や出来事はほとんど音楽に関わりがある。

ピアノに興味をもち、苦しみに絶えながらも勉強し、それがいつか個性となり人と仲良くもなれた。新たなことへの挑戦もあり、非常な悲しみからの学びもあり、そして今、またちがう世界の扉を開こうとしている。

僕の黄金時代について黒いしみも、いつしか溶け込み、経験として僕の一部となった。そしてまた、輝きはじめた。

これからの中学校時代、そして高校時代と、僕のまわりの世界は次々と変わっていくだろう。そんな中で、どんなことが起きるだろう。

まわりの友達との関係や、勉強のこと、両親のこと、自分の成長のこと。苦しみや悲しみにうちひしがれて、今日は何もいいことがなかったと思う日があるかもしれない。もしかすると、切ない恋があるかもしれない。それはだれにも分からない。

だが、僕は死ぬまで音楽とは、ピアノとは友達であろうと思う。もはや僕にとって音楽は、自分の感情そのものであり、僕にとってピアノは、言わずともその感情を相手に伝える、「感情の代弁者」なのだ。

今でも僕は、自分の音楽をピアノを通して、指先を通して、人へと伝えてきた。それにより、僕は音楽で人となることができた。これからの人生もさまざまな

人との出会いがあり、また別れがあろう。その全てを僕が音楽で表すことにより、僕は冷静になり、僕は優しくなり、そして、僕はその全ての人たちの友達になれるのだ。

今までの経験は全てこのことを示していた。それを音楽が教えてくれた。もはや音楽は僕にとって友達以上の関係である。先生だ。

音楽は、これからもずっと僕の恩師である。僕に歩むべき道を示してくれる素晴らしい存在であり続けるだろう。永遠に。